「母を亡くした人への手紙」～求めるところに出遇いあり

●今年、母を亡くした人への手紙

お便り落掌いたしました。
今、布教で○○市におります。

まずは、お母様のご逝去の報に接し、心からお悔やみを申し上げます。
○○と日本の距離は、往復も大変だったと思います。
ご家族みなさま、お疲れの出ないようにくれぐれも御身おいといください。

●法を求める

さて、貴方が、お浄土のこと、浄土真宗の教えを大切にされていること、とてもありがたい生き方をされていると拝察しました。

そしてまた、貴方が、お母様を思うのは、そのまま、お母様から思われている間違いのない証拠です。

お母様は、貴方を心から、思って思ってくださっていることと思います。

そうであれば、貴方は、お母様のお心を大切に受け止める生き方をなさることがこれからの指針となることでしょう。

お母様のお心は、貴方のことを心から大切に思い、どうか、豊かな心で、確かな人生を歩んでほしいと思われているのではないでしょうか。

貴方が、手を合わせ、お念仏を生活習慣として生きるのであれば、親鸞聖人（1173～1263）のこと、そして、その教えを少しここにご紹介します。

●仏教の教え～道理にかなって救われる

仏教の教えは、縁起の道理です。

縁起とは、関わり合って成り立っているということです。

たとえば、日常的には、私とあなたは別々であると考えますが、このことを仏教では「分別（ふんべつ）」といいます（人間は、この分別をすることで自分にとって都合の良いように考えふるまうと仏教は教えます。それで、分別とは迷いを生み出すもとになります）。

仏教の教え、その道理からよくよく考えると私とあなたは、深いところで繋がっています。これを「無分別」といいます（教え、道理にかなって生きるとは、この無分別によって生まれる新しい仏の智慧をめぐまれることです）。

もちろん、個体として、物理的に、私たちの存在は別々ですが、その関係性は、繋がっている、あるいは、重なり合っています。

そのことに気づくことを「さとり」ともいい、また、「真実の信心（聞名体験）」といいます。

親鸞さまは、日ごろ求め学んでいる阿弥陀仏の本願の教え、その慈悲を自分の「いのち」の究極のよりどころとして聴聞し（学び）、生活習慣として称名念仏をするならば、そこに聞名（聞其名号＝自分の称える念仏を、如来の呼び声として心の耳で聞こえる）の実感が生まれると〈無量寿経〉などの教えを通して領解されました。

●聞名ということ

聞名というのは、〈無量寿経〉に何回も出てくる言葉です。

聞名という体験のことを浄土教では、信心といいます。

少し説明をします。それは、私が阿弥陀仏の教えを選び取り、それ以外の教えを選び捨て、生活習慣として称える念仏は、その称名念仏が段々と深まってくると、よくよく考えてみると、私のいのちにいつもいてくださる（重なり合っている）如来さまが、私の称名念仏の声を通して呼びかけてくれているという実感、気づき、めざめの体験のことです。

もちろん、聞名といっても肉体の耳で聞くのではありません。念仏を生活習慣としている中で生まれる心の耳で聞くということです。

私は、この聞名ということを自分なりに次のように味わっています。

私が折りに触れて称える念仏は、そのまま如来さまが、私に向かって、「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と呼びかけてくれていると私は表現しています。

教えと生活は別々ではなく、重なり合って受け止めるところに、今まで気づかなかった自分の自己中心的な生き方（分別）が深く知らされ、それと同時に、私を気づかせる道理、阿弥陀仏の慈悲がしみじみと深く知らされるということです。

そのように実感できる人にとって、如来さまと私は別々ではありませんね。

念仏を生活習慣として称えるところに生まれる、深い気づき、実感を浄土教の仏教では、「真実の信心」というのです。

いままで、おとぎ話だと思っていた如来さまが、念仏を生活習慣として人生を歩む人にとって、確かな実感として出遇っています。

●心外無仏ということ

もちろん、仏教のお話を聞こうとしない人にとって、阿弥陀仏もお浄土も、まったくなんの意味もないこと、おとぎ話に聞こえるでしょう。

しかし、教えを学び、求め、念仏を仏道として修める人にとっては、確かな人生のより所として開かれてきます。

中国、魏の時代の曇鸞大師（476～542）は、「心外無仏」（『往生論註』）と示し、親鸞さまはその言葉を『顕浄土真実教行証文類』（『教行証文類』）に紹介されています。

（心とは信心ということで）信心（聞名体験）の外（ほか）に、仏無しということです。

どうぞ、お念仏を生活習慣として、教えを学び、求めてください。

間違いなく、お母様は、貴方の「いのち」と一緒にいてくださり、貴方を護り、導いてくださっている仏さまであったという確かな安心を持たれることだと思います。

要領を得ないことを長々とお書きしましたが、どうか、意のあるところをくみ取っていただければ幸甚です。

追伸、母は、武蔵野大学の雪頂講堂で貴方とお話ができたことをとても喜んでいます。
日本に来て、仏法を求め、一人で仏教公開講座に来ていた貴方に声をかけたことで、今日までお付き合いが続くことになりました。
昨年一二月、九十二歳になりました。

この広い世界、長い人間の歴史の中で、貴方にお目にかかれたこと、そして、仏教について、お話をすることができるようになったことを嬉しく、ありがたく思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。